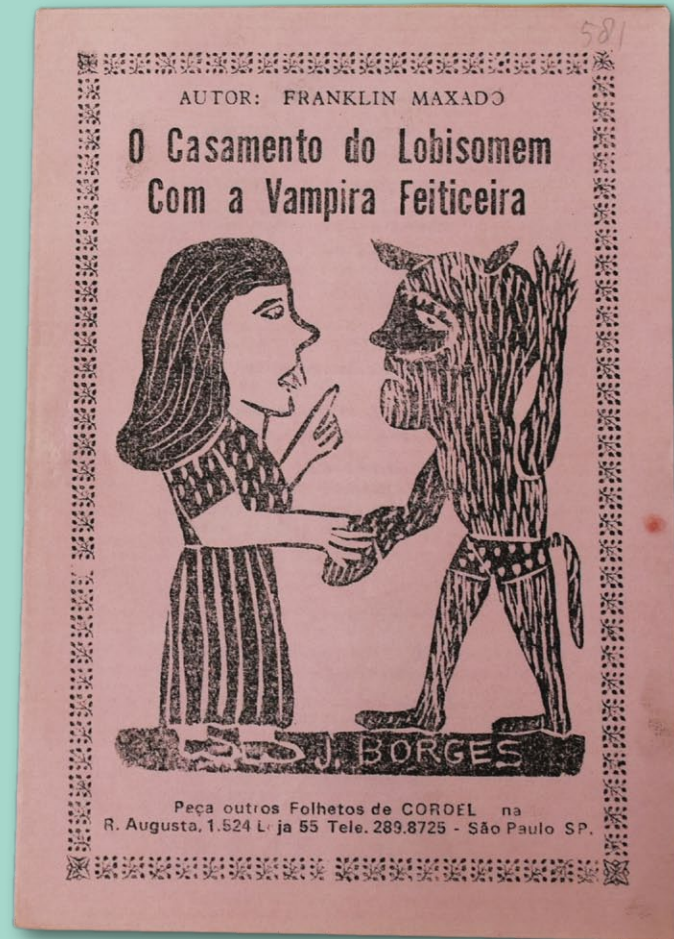


想像界の生物相 狼男

東京大学教授 いけがみ しゅんいち
池上 俊一



資料名 | 民衆本「狼男と吸血鬼魔女との結婚」
フランクリン・マシャード著、J・ボルジェス画

標本番号 | H0113171

制作年 | 1980年2月

地域 | ブラジル

サイズ | 縦16cm × 横11cm

◆◆ヨーロッパの狼男像の変遷◆◆

満月の夜に森のなかや荒野で狼おおかみに変身し、蛮行を働くという狼男の伝説は、ヨーロッパ各地に広く伝わってきた。すでに古代ギリシャには、アルカディアの王リュカオンが、人肉をゼウスに供した罰として神によって狼に変身させられたとの言い伝えがあったし、中世初期には、ゲルマン民族の主神オーディンに死者の軍勢として仕える者たちが狼の姿をまとったばかりか、特定の犯罪（殺人、墓暴きなど）を犯した者がアウトローとして氏族の生活圏の外に放逐されるときにも、狼になったと看做みかされた。ヨーロッパで狼男がもつとも人気を博したのは、一二〜二三世紀の宮廷世界においてであった。当時、周期的に狼に



ルーカス・クラナッハの木版画「狼男」1512年

変身することを宿命づけられた騎士が文学形象として登場し、この男（狼男）は悪辣な妻の犠牲者で、知性も徳性も兼ね備えたキリスト教道徳と正義の護持者としてもはやされた。

だが中世末から近世になると狼男の評価は一変する。それは魔女や妖術師が悪魔と契約を結び、その力を借りて狼に変身した存在だと考えられるようになったのである。子どもを貪り食うなど恐るべき残虐行為にふける狼男の存在が、魔女裁判で白日の下にさらされ、フランスの裁判官アンリ・ボゲは狼男を次から次へと火刑に処した。

◆◆新大陸でのハイブリッド化◆◆

このように、ヨーロッパ内でも時代によって狼男のイメージは大きく移り変わったが、新大陸へともち込まれると、さらなる変容を遂げたようだ。民博の所蔵資料のひとつである民衆本「狼男と吸血鬼魔女との結婚」からそれは窺うかがわれる。

洗礼前の子供たちの血を吸っていた吸血鬼と、次々人を殺していた狼男は、別々に「狩り」をしていたが、たまたま出会うと敵ではなく友として一緒に狩りをしよ

うという話になり、ついに結婚してしまう。残忍な気味の悪さもあるもののどこか滑稽で、掲載の版画がその感じを強めている。墓掘り人やマテ茶採集者の登場、馬や犬をはじめとする動物たちの集合など、生活の香りもプンプンしてくる。

それもそのはず、本作品は一九七〇年代から八〇年代にかけて、ブラジルとりわけその北東部で盛んに作られ青空市などで売られた「リテラトゥーラ・デ・コルデル」、すなわち「ひもの文学」（市などでひもに掛けて売られた安価な冊子本。起源は一九世紀後半にある）とよばれる民衆本のひとつだからである。一六世紀のコンキスタドールによる征服後、ブラジルや他の中南米諸国には、ポルトガル人、スペイン人の植民者・宣教師によって、キリスト教的な妖術・悪魔観念がもたらされたものの、同時に先住民の土俗的な呪術信仰との相互作用も起きた。一六世紀後半には多くのアフリカ人が奴隷として連れて来られて、さらに別種の魔術観念が加わった。「ひもの文学」にあらわれた狼男も、こうしたハイブリッドな観念群に連なるものではなからうか。